

Editorial

今月号の特集について

福田吉治

帝京大学大学院公衆衛生学研究科 教授

「新型コロナからの教訓——モニタリング報告」は、3年連続、年に一度(12月号)という、これまでになかった特集企画でした。今回(2025年)が最後ということで、サブタイトルに“ファイナルアンサー?”を付けました。コロナ禍で明らかになった課題が、その後の3年間で解決できたのか、できなかったのかの答えを出してみようという意図でした。

本号の論文を読むと、CAICM(内閣感染症危機管理統括庁)やJIHS(国立健康危機管理研究機構)の設置、DX(デジタルトランスフォーメーション)の進展、予防計画等の策定、地域医療体制の確立、人材確保・育成システムやリスクコミュニケーションの推進、都道府県・保健所・市町村の連携など、多くの課題に対して着実に解決策が検討され、実行されてきた様子が分かります。

今年話題といえば、ダイヤモンドプリンセス号でのコロナ対応を描いた映画「フロントライン」でした。大学院の授業の一環で学生と映画館に見に行きましたが、コロナ禍で奮闘した専門職にも一般の方にも大きな感動を与える映画でした。また、コロナ禍での保健所のひっ迫を描いた「終わりの見えない闘い」は2021年公開ですが、今もさまざまな機会で上映されています(先日の公衆衛生学会でも上映されました)。このように、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)を忘れないための記録が多くあります。3年連続のこの特集が、コロナを風化させない貴重な記録として長く読まれることを願っています。

さて、本特集企画では、原則3年間、同じテーマで同じ先生に執筆いただきました。おそらく執筆者の先生方は、毎年、関連する分野の進捗を示さないといけないと、かなり苦勞しながら執筆されたのではないのでしょうか。私の思いつきの特集アイデアに、長くお付き合いいただき、本当にありがとうございました。論文に目を通すと、この3年間、それぞれの分野で、多くの方がコロナ禍での課題を解決しようと、そして、次のパンデミックに備えようと、さまざまな努力をしてきた様子がうかがえました。なにより、コロナ禍で苦勞した人たちが、あの時のさまざまな思いを胸に、あのような経験は二度としたくないという強い意志が感じられます。

ファイナルアンサーについて、あえて総括するとすれば、解決された課題もたくさんある一方で、まだ解決されていない課題や新たに明らかになった課題もあったようです。どのようなことに対しても完全な準備はありません。次のパンデミックでも、結果的に準備不足と反省することはきっとあるでしょう。しかし、確実に、私たちはコロナ前よりも進歩しています。“さあ、準備はいいかい?”、“いいよ!”と自信を持って、まずは、それぞれの持ち場で日常の業務を行っていきましょう。そして、有事の際には、あの時のように、フロントラインに集合しましょう。